

「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(17)

講題：台湾人學習者に対応する日本語文法教育
—対照と認知の視点からの一提案—

陳順益副教授

(2025. 01. 09)

要旨

1. はじめに

講演者陳順益先生は台湾において長年日本語教育に従事し、常に、いかにして学習者によく理解させ、効率的に習得させる方法はないかと考え続けている。近年の研究も主に、初級・中級日本語に出てくる基本語彙の多義語(例：「かかる—かける」「つく—つける」「出る—出す」「切る—切れる」など)を中心に、それらのイメージ的意味及び意味ネットワークを明らかにし続けている。なお、イメージ的意味とは、陳先生が作り出した用語で、言葉の表面的な意味ではなく、ネイティブ・スピーカーがその言葉を使うときに頭の中に実際に思い描いている概念イメージのことを指すという。

本講座では、台湾人学習者がよく間違えた文法範疇(例：格助詞、ボイス(授受、受身、使役)、自他動詞など)を調査し、学習者が誤用した原因及びストラテジーを明らかにし、それに合わせて如何に効率的に習得していくかを提案する。

本講座では、主に筆者が認知言語学及び対照言語学(日中対照)のアプローチで得た研究成果を利用し、言語教育特に文法教育に応用できるかを検討しつつ、台湾人学習者に相応しく、効率的に習得させる文法教育の在り方を提案する。

2. 学習者の誤用及びストラテジー

2.1. 誤用の原因

われわれは外国語を習得する際に、自国語に翻訳しながら、勉強していくのが普通であろう。台湾人学習者の誤用及びストラテジーは様々あるが、初級・中級段階の学習者における誤用の多くは母語干渉からきたと考えられる。陳先生は誤用の最も大きな原因は日本語と中国語における構造の違いや視点の捉え方の違いにあると考え、「基本的に対応していない部分は習得しにくいところにもなる」と主張している。

2.2. 誤用しやすい文法範疇

陳先生の調査によると、台湾人学習者にとって最も難しく誤用しやすい文法範疇は主に以下のようなになる。

- 助詞(格助詞、提題助詞「は」)

- 指示表現（こ、そ、あ）
- 授受表現（やりもらい）
- 受身、使役、使役受身
- 自動詞と他動詞の対応
- 存在表現（ある、いる）
- 条件文
- テンス、アスペクト
- ようだ、そうだ、らしい…etc.

3. 認知及び対照のアプローチによる分析

陳先生は上にあげた文法範疇を認知言語学のアプローチを用い、中国語と対照しつつ、台湾人学習者がよくわかるように簡単に説明した。ここでは台湾人学習者が最も習得困難と思われる格助詞（主に「を」「に」「で」）と自他動詞を取り上げて説明していく。まず格助詞の「を」「に」「で」について、以下のように定義した。

「を」：“把”に訳すことができるもの⇒他動詞→動作が直接施す対象

“把”に訳すことができないもの⇒自動詞→通過の経路

「に」：動作が終わったあと主体又は客体が存在する場所：帰着点（プロトタイプ）→さらに、目的地、目的、動作の相手などの意味へと拡張。

“V在場所”に訳す：“坐在椅子上”（椅子に座る）

「で」：動作を行う場所（プロトタイプ）→さらに、道具、原因・理由などの意味へと拡張。

“在場所 V”に訳す：“在教室學習”（教室で勉強する）

陳先生はさらに「場所を出る」と「場所から出る」そして「場所に出る」の違いについて説明した。

次に自他動詞について陳先生は「他動詞は常に動作で、持続可能である。一方、自動詞は普通、動作が行った後の状態を表すという特徴がある」と述べ、「有対自他動詞（一般に自他対応と分析されるもの）は、似た概念であり、自動詞と他動詞の違いは、意図的な外力（外的プロセス）があるか否かの対立である。簡単にいうと、[「外力（意図的）」＋自動詞の概念＝他動詞の概念]のように捉えることができる」というように自他対応関係を公式化している。

例えば、ドアを開けるという動作行為は、何かの目的で意図的に対象物であるドアに働きかけ、最後にドアが開いている状態になると説明しても良いだろう。この公式は 100%応用できるとは言えないが、初・中級段階はもちろん、上級段階においても十分応用できるのではないかと思われる。

4. 台湾人学習者に役立つ文法知識

最後に陳先生は台湾人学習者にとって役に立つ2つの文法知識を提案した。

4.1. イメージ的意味

上述したように陳先生によると、イメージ的意味とは、言葉の表面的な意味

ではなく、ネイティブ・スピーカーがその言葉を使うときに頭の中に実際に思い描いている概念イメージのことを指す。イメージ的意味は次のような特徴を有しているという。

a. 「イメージ的意味」は、動詞のみならず、形容詞、名詞、格助詞などあらゆる言葉に存在している。

b. 常にプロトタイプの意味になり、さらに周辺の意味へと拡張することが可能であり、意味的拡張 (extension) により全体の意味カテゴリー (category) が形成される

c. カテゴリーと同様に、「イメージ的意味」にも様々なタイプが存在している。

4.2. 促音規則(音読み)

漢字は中国から伝わったものである。日本語では、入声字(末尾子音が p, t, k で終わる漢字)を日本語の音韻体系に受け入れるために、促音化することがある。従って、入声字から音読み漢字の促音をある程度類推することが可能である。現在の日本語では「発はつ」「学がく」のように、音読みは「二音節二拍」の漢字はもともと入声字であることが考えられる。

T 入声字：末尾子音が「ち、つ」(例：一、発など)の漢字が清音(さ行、た行、か行、は行)の漢字と接続する場合、促音化する。(但し、は行の場合、促音化後は「ば」に変わる)

例：一(いち)+発(はつ) ➡ いっぱつ

K 入声字：末尾子音が「き、く」(例：積、学など)の漢字が清音(か行)の漢字と接続する場合、促音化する。(数字六は例外)

例：学(がく)+校(こう) ➡ がっこう

P 入声字：現在はすべて「う」になってしまうため、常用漢字では「十、雑、合、納、入」以外は促音化しない。

日本語まとめ 陳順益

中国語訳 陳順益